
大魔導師になろう！？

激闘魂

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

大魔導師になろう！？

【NZコード】

N3110F

【作者名】

激闘魂

【あらすじ】

興味本位で召喚魔術を使われた藤夜は元の世界へと帰るため、この世界で大魔導師になることを決意する。

第1話・光に包まれて

第一話・光の果てに

「なんだこー……」

まぶしい光に包まれて思わず目をつぶつてからあたりに変化がないことに気づく。

目を開けると巨大な建造物が目に入ってきた。それはまるで、どこかの西洋のお城のようにも見えた。

「あれ？ 確か俺は……」

呆けてその場に立つていると、遠くから2人ほどこちらに向かって走ってくる。どちらも焦った様子に見えた。

「&* @¥、#\$_!」

「あのーすみません」

「#* + >¥」

なんて言っているんだろう。外国人なのかなあ。と、思考を巡らせていると竜灯はハタと気づいた。そう、藤夜は英語を使って話すことがほとんどできない。真面目に授業聞いてればよかつた！ と、後悔している場合でもないので、自分の脳をフル回転させ会話に成り立つような英語を探してみる。

「オ～、マイネームマイズトウヤリュウヒ」

「… \$ # % ○」

だめだ。通じない。てか本当に何語？と考へていると、追いかけてきた2人のうちの1人。若い女人が突然竜灯の手を掴む。『なに？なに！？』と、混乱していると、そのまま藤夜を引っ張りながら走りだした。

「え、ちょっとちょっと」

急に走り出されたのでこけそうになりつつ女人に引っ張られていくと、どうもあのバカでつかい建物に向かっているようだけ入るんだろうか。

だが、正面の扉をスルーして壁沿いを走りながらあまり目立たない古びた扉の前で止まつた。どうもあまり使わないらしく所々サビている。どうも鍵が掛かっているらしく、もう一人の若くてやや優しい顔の男がポケットから鍵を取り出して鍵を開ける。ギギギと鉄と鉄が擦るような嫌な音を発しながら扉は開いた。二人は中の様子を確認すると走り出した。もう手は放してあるが、こんなところで迷子になつては適わないと、あわててついていく。

走つて5分位した頃だろう。俺以外の二人は肩で息をしながら人目を掻い潜り目的の場所へ向かっていると扉が無機質に並んでいる所に出た。誰もいないことを確認すると、いくつもの扉。その1つを開け、どこかの部屋らしきところに藤夜を連れていく。

ガチャン、と音がする。そちらを向くとなんか錠前をドアに掛けつい……ってちょっとまで。なぜ鍵をかけねばならん。

2人が歩いてくる。喧嘩して勝とうと思えば勝てるかもしないが、何せ此処が何処か分からないのでここは大人しくしておいた方が得策である。

混乱した頭を必死で整理する。自分の今までの行動を振り返りながらある事実に突きあたる。確か俺は……。

藤夜のいつもの日常が変化したのは先ほど。3、4分ぐらい前に遡る。

立ち入り禁止と書かれている屋上。

足をぶらぶらさせながらおにぎりを頬張っている男がいる。

彼の名は竜灯^{りゅうとう} 藤夜^{とうや}。17歳のごく普通の高校生だ。運動神経が良く、喧嘩はほとんど負けないくらいは強い。しかし、勉強の事となるとからつきしだめで、授業はつまらないのでいつも授業中は屋上で過ご^ごしている。一応モテそうなルックスだが、恋愛の事は結構鈍感であり、好意の眼差しを送つても全くきずかない。バレンタインのチョコは、甘いのが苦手と抜かして友達にあげる始末。両親ともども早く死に、今では姉と2人で生活している。

「あ～あ。面白い事でも起きないかなあ」

藤夜は嘆息した。最近は毎日同じ行動をしている気がする。

「じうなんか刺激がほしいんだよな、刺激が」

うだぐ、と叫び屋上の端っこを椅子代わりにして運動場のほうを

見る。体育でもやつてゐるんだろうか？ そんなことを考えながら屋上を見回す。そしてある物を見つけて、にやりと笑つた。

藤夜が見つけたのは石。この屋上から運動場に向かつて投げればある方向に飛んでいくだろう。そう、こつもどなり散らしてくる先公の頭にだ。

石を持つて肩をブンブン回す。今日も肩は絶好調だ。そして、憎しつく先公の頭に狙いを定める。

「ピッチャー振りかぶつて、投げました！ ってね

見様見まねのピッチングモーションで石を投げようとしたその時。後ろから突風が吹き、その風のせいで藤夜はバランスを崩した。

「……え？」

「」のままだと屋上から落ちてしまつ。踏ん張りを利かそうとするも、もう体の勢いは止められない。真っ逆さまに屋上から落ちていく。

「俺、もう駄目かも……」

こんなところで死ぬのか。なんて最悪な人生だ。そんな感じに悲観に暮れていると、突然目の前が光に包まれた。

目が焼けると錯覚させるくらいの光に思わず目を瞑る。そして、そのまま意識を失つた。

そこまで覚えてこね。
じゃあこには一体……。

第1話・光に包まれて（後書き）

初めまして。『激闘魂』です。

文章力皆無の僕ですが、なぜか小説を書くのが好きなのです。（笑
なので、誤字・脱字。それに、この文法間違ってるんじゃないのか
？とか、感想があれば言ってください。

『人は間違いを指摘されて強くなるのだ！』みたいな感じなので、
ビシバシ指摘してください（笑

一週間に1度は更新します。

第一話・「ここに来た訳

第一話・「ここに来た訳

確かにそこまでは覚えている。じゃあここはいつたい……。
とにかく今は、自分の状況を確認することを最優先にしようと、
藤夜は考えた。

まずこの状況から3つの説が考えられる。

- 1・これは夢である。
- 2・死後の世界。
- 3・異世界……。

つてどいつも考へても『異世界』じゃないだろー。うむむ……、少し
混乱してたみたいだ。とにかく落ち着かなければこの先どうなるか
わからんからな。

……あの状況から察するにここは死後の世界なんだろつか。とい
うことは俺は死んだってことだな。
いや、やっぱ死にたくなかつたな。夢であつてほしい。

などと思考にふけつていると、男の人が俺の頭を掴んできた。

「 ? + @%」

何かブツブツ眩い後、俺の頭を思いつきつ掴んでくるので抵抗する。

「痛い、痛いって」

「おっと、すまんすまん」

そう訴えると、男の人はさっと手を引けてくれた。……あれ？

「私の言葉がわかるかね？」

「はい。……すみません。あなたたちは何なんですか？」これは何処なんですか？そもそも俺は何でここにいるですか

「そういうペんに質問するな。まあまで、順々に答えてやるから」

一転して親しげな顔をすると、じりじりと手を差し伸べてくる。握手手……ということだろうか。

よくわからないが、とにかく手を握つてみる。

「よつひん。魔法の国』ホド』へ

「は？ 今なんと？」
「ふむ、混乱するのも無理はないだろ？。しかし、真剣に聞いてほしい」

神妙な面持ちになつて話し出す。

「……は、貴方の世界とは違つ。やつ、異世界と並んだまづがいいのかな」

「へ？」

何だそれは。異世界？ ハツ、ばかばかしい。マンガじゃあるまいし。なるほど、こりゃ夢か。そうかそうか。普通に夢だ。そうに違いない。

「ちなみに夢じやないぞ」

お～お～。いつちよまえに言つたやつて。そんな口をこていいのか～。夢から覚めたらお前らは消えるんだぞ～。

「ばかばかしい。これが夢じやなきやなんだつていうんだ」

そう言って頬をつねる。あ～イタイイタイ……あれ？ おかしいな？ 痛いはずないのに。

「これでわかったか

「お前ら、俺に何をした」

「お前をこの世界へ召還した」

「田的は何だ」

「申し訳ないのだが……」Jのアリス校長が偶然ながらにも隠し部屋を見つけてな

すると隣にいた女。アリスが申し訳なもんじで

「『めんなさい』つい先ほど『転移の書』とこいつを見つけて、興味持つちゃって使っちゃったの」

「そうですかい。でも、俺は元の世界に帰れるんでしあうね

「…………はい。…………一応」

「そうか帰れるのか。よかつた。帰れなかつたひどいよつかと思つたよ。でも…………。

「一応つて何ですか、一応つて

「残念なことに私ではあなたを元の場所へ戻せないの」

「…………どうじうことです?」

「転移つて言つてもなんでもうまくできないわ。これは…………異世界からランダムに自分の思った所へ飛ばすこと…………」

つまり、異世界から呼び寄せられても帰ることができないと…………。

「…………俺は、そのランダムに選ばれたことありますか?」

「はい」

と残念そうな顔をした。ランダムに選ばれた…………ひどんだけ運悪いんだろ俺。

「でも一応つて言いましたよね」

「ええ。その隠し部屋にもう一冊時空移動の本があつたのです。その名を『時空移動の書』」

「つてそのまんまじやないですか！」

おもわずツッコむ俺。

「で、それで帰れるんですね」

「一応」

「それじゃ帰らしてください」

「今は無理です……」

今? とはぢりこひじだりつ。いぶかしんでいると、足元を見ながらとんでもない」とを囁く。

「「Jの魔法は、詠唱者。つまりあなたしか元の世界へ帰れません」

「じゅ」と?」

「「Jの魔法は自分の記憶の中の場所しか行けません」

つまりドラ○Hのル○ラみたいなもんか。

「「Jの転移系魔法は大変魔力を消費します。今回の私も、もう魔力がありません」

すると、今まで黙つていた男があれの将来を絶望で染め上げることを言いのけた。

「ちなみに、この方はこの世界の魔導師の上に立つお方。魔導師の中の5本指に入るお方です」

「……え~と。どうすればいいんだ?」

「申し訳ないのですが、大魔導師になつてくださいー」

「……は？」

非日常から脱却した俺の人生はここから始まる。アリスのとんでもない言葉と共に。

第一話・JAPAN來た訳（後書き）

感想などなど、よろしくお願いします。

第三話・帰る方法（前書き）

うむむ。

文章力のない自分に泣きそうです。

読みにくいかもしませんが、頑張つてください

第三話・帰る方法

第三話・帰る方法

「……どゆこと?」

何回目となる思考停止状態で尋ねる。その顔は間抜けとしか言いようがないほど面白い顔をしていた。

当たり前だ。急に異世界だの大魔導師になれたの言られて平然としている人間はいないだろう。いふとすると仙人か仏ぐらいなもんだ。

「ふつ……いや、あの、そ、その、ご、ごめんなさいいいいい

思わずふいたアリスを般若のごとく睨みつけた俺はそこらへんに置いてあつた椅子を振りかぶり脅す。アリスの顔は真っ青　自業自得だ

しばらくの間混乱状態でまともに話すらできなかつたアリスだったが、どうにか落ち着きを取り戻している。

「で……、なぜ俺が大魔導師にならねばならんのか教えてくれないか?」

「ほん！ と咳をし、さつきまでの混乱っぷりが嘘のように落ち着いた口調で説明してくれた。

「え～、この時空魔法。これは簡単に説明しますと、詠唱者。つまり今回ではあなたの身体を魔力の塊に変換し、それごとあなたの元の世界へ飛ばします」

「この説明だけだと簡単そうに聞こえるんだが……」

素朴な疑問を広く俺に向かってさらに説明を加える。

「確かに簡単なんですが、どんな人でも最低3つは乗り越えなければならぬ壁があります。まず第一に身体を魔力に変換することは簡単に見えて難しいことです。魔力のコントロールや使い方、それに膨大な魔力。全てにおいて完璧でなければなりません」

「だから大魔導師になれと……」

「そういうことです」

なんとも偉そうに説明しているアリスにムカつとしたものの、これから大変なことになることは確実である。

「そして第一に、魔力の塊であるあなたは体の再構築などでほどの魔力を消費します。なので、あなただけでは元に帰るための次元を超れません。無理に超えようとすれば次元の狭間から抜け出せなくなります」

「……マジ？」

「もちろんです。マジです！ 危険です！ ですから、次元を超える手助けを世界樹の精靈様へお願いします。精靈様ならあなたを元の世界へ戻すことも可能になるはずです！ ……多分」「また！ 今多分って言つたよな！ 言つたよな！」

ものすうじぐ不安なんですけど。

「そ、そんなことより第三の問題ですが、もしも元の世界へと帰ることができても壁の中だつたり地面の中だつたりしたら……想像しちゃりませんね？」

うげ……確かに想像したくない。

「そんな事のないようにするために、私を含む5人の魔導師があなたをサポートします。わかりましたか？」

なんか話を逸らされた感じがするのだが……。

「……ちょっと待て。その説明が確かになぜ俺はここにいらっしゃれる？」

少し困った顔をしたアリスは俺を手招きする。

「ついてきてください。行きながら話しましょっ」

本棚の中から一冊本をとる。すると、本棚が動き漫画やアニメでおなじみの隠し扉が……。意味なく感動している俺をおいてせつさと歩きだしてしまつ一人。それに気づいてあわてて追いかける。

中はせりに本が沢山あった。そう、沢山あるとしか言えない……。

「つてなんでこんなに本があるんですか……」

自分の視界に入るところ全てに本棚が並んでいる。上を見ても先が見えないくらい本棚が伸びていた。まるで、本棚で作られた塔の中に居るみたいだ……。

「大丈夫ですよ。」これは普通の空間とは違います。いわば別次元?」

アリスが俺の疑問に答えながら一つの本棚に近づく。今度は一冊分だけ不自然に空いている場所にさっさと抜き取った本を挿しこむ。目の前の本棚が奥に動き左に消える。田の前に階段が現れた。俺は呆れて声も出ない。

すると重大な事を思い出したようにアリスは『あー』と叫んだ。

「まだ名前教えてもらつてませんね」

「今頃ですか……まあいいでしょう。まずは僕の名前から。言い遅れましたが僕はシモン・マグスです。モグス……とでも呼んでください」

さつきの男。マグスはそう言ってさわやかに笑った。アリスはそれに今気づいたみたいな顔になった。

「マグスいたんですか？　だつたらさつき止めてくれてもいいじゃないですか」

アリスは頬を膨らまして言つたが、マグスは表情を変えずこいつ言い切つた。

「だつて校長を苛めるのが僕の趣味の一つなんですか？」

アリスは苦いような、それでいて諦めたような顔になつた。自分の顔も引き攣つることに気づく。それを一瞬と眺めるマグス。少々の沈黙の後、アリスが口を開いた。

「はあ……もういいですよ。それよりあなたの名前は？」

「お、俺は竜灯 藤夜。藤夜でいいよ」

「トウヤ？ 変わった名前ですね」

ついであんた達に言われたくないよ。

「いやいや、いつから見ればあなた達のまづが変な名前です」

そう言つてふと疑問に思つたことを口にする。

「そういうやつ、俺と会つたときはよくわからぬ言葉で話してたのに、なんで今は日本語を話してるんだ？」

「それはですね……翻訳魔法を使いました」

「翻訳魔法つてそのまんまの意味か？」

「はい」

この世界は結構便利だなあ。なんて考へると、アリスとマグスが真剣な顔になつた。

「話が逸れてしましましたが、本題に入ります。まず、この下には

儀式場がありました

「ありました？」

もうないってことなのか？

「その場では、校長でも今回の様な魔法が使えるよ！」となっていました。しかし今回は転移魔法を使ったので、壁が衝撃に耐えきれず崩壊してしまいました」

「……マジ？」

「ええ、マジです」

俺は居ても立ってもいれなくなり、急いで階段を駆け降りる。そこにあつたのは、通路を完全に塞ぐがれきだった。隙間なんてこれっぽちもない。

「この崩壊で儀式場は埋まり、使い物にはならないでしょう」

「だから、あなたに『大魔導師になつて帰る方法』を提案したのです」

「すこし、考えさせてくれ

俺はそつアリス達に呟いた。

第三話・帰る方法（後書き）

こんな小説にもユニークアクセス数が1000を超えた（涙
家で狂喜乱舞してしまいました。
本当にありがとうございます。

第一話で『ホド』の名前はテルズのパクリと思つてる人もいるかも知れませんが、由来は、生命の樹の7番目。栄光のホドです。ネットで調べたらテルズも同じ名前を使ってたのでびっくりしました（汗

第四話：新たなる生活（前書き）

遅くなつてごめんなさい————！おれ
テストとか学校の行事とかで遅くなりました。
楽しみにしてた方々。本当にごめんなさい（いるのかなあ？
や！ いるはずだ）

第四話・新たなる生活

第四話・新しい生活

木々が生い茂り、小鳥たちのさえずりが聞こえる林で、藤夜は木にもたれかかり考え方をしていた。

もちろん帰る方法についてだ。あれからアリス達と離れ、建物を散策しながら考え方をしていたらいつの間にかここに来ていた。まあここは木々のお陰で影ができ、外よりは涼しいので休憩をするにはもってこいの場所だ。

「大魔導師があ。つたく、こんな話をしたら笑われるだらうな」

早く帰りたい。しかし、自分みたいなのが大魔導師なんかになれるんだろうか。

「無理だよなあ……」

「無理じゃありませんよ」

後ろから聞こえた声にビクッとしながら後ろを向く。そこにはアリスが立っていて、こちらが振り向くとニコッと笑った。

「これでも私、人を見る目は確かなんですよ」

「自分で言つかる普通？」

アハハ、と笑つて誤魔化したアリスに呆れつつ、もう一度アリスを見た。

エメラルドグリーンの瞳はまるで自分を吸い込むような深い色をしていた。髪は金色で、まるで金色の草原をイメージさせる。背は自分より少し高めで163cmぐらいだろうか。たぶん10人中9人は振り向くだろう。いや、振り向くはずだ。

「どうしたんですか？」

気がつくとアリスは俺の顔をまじまじと見つめていた。その仕草はまるで幼い子供の様だ。

俺は照れ隠しのために話題を変えることにした。

「あ、そ、そうだ！ マグスが『校長』って言つてたけど、『』は学校なの？」

「そうですよ。ここは『魔導師育成専門学校オファーム』よ。大体はオファーム校って呼ばれているわ」

「魔導師専門学校お！？」

そんな専門学校がここにはあるのか。まあ、魔法が使えるこの世界じゃあつて当たり前か。

「あなたの世界じゃ魔法はないの？」
「ん？ そんなもんこっちにやないぞ。そんなもんは嘘つぱちだからな」

何気なく言ったその言葉にアリスは絶句していた。まるで信じら

れないとも言つかないやつ。

「魔法がないー!? ジャあどうやって生活しているのー?」

「そりだな。科学の力……かな」

アリスは不思議そうな顔をした。

「カガク……?」

「それじゃ、俺の世界について話してやるよ」

暇つぶしひらこにはなるかな?

「凄いですう！ なんで鉄の塊が空を飛んだり、地面を走ったりするんですかあ？ 不思議な国ですねえ」

魔法とかある国のほうが変だつてー。ちやんと自覚もて！

「そんな事言つてもなあ。こいつの世界じゃ当たり前だつたし」「だつて平民だつてそんな事ができるのよ？ 魔法を使えない人平民は貴族に頼らなきやそんな事できなーのよ」

『平民』？ 『貴族』？ おかしな言い方だ。まるで身分が違う
よつな言い方して……

「もしかして……」の世界つて身分の違いとかあるの？
「ええ、最近では貴族が平民を迫害するなどと問題になつてこます

ね

なんかいやな予感しかしないんですが……

「……それじゃあ俺は平民だよな」

「はいそうですよ」

何を当たり前なことを　　なんて顔をしていろがこいつらにとつて
は大変重要な事である。

「平民の俺に協力してくれる魔導師がいるのか？」

すると、アリスは今までの顔を曇らせた。へ？　もしかして……

「それは……まあ頑張つてください。えへっ」

だめだ。話にならん。

ドドドーン、とした空気が辺りに漂う。藤夜は体育座りで地面に
の字を書いている。対するアリスは如何してわからず、おろおろし
ている。

このままでは仕方がないと思い藤夜が復活した。

「はあ……分かった。それじゃあ今後の目標は『魔法をうまく使
事』と、『あと四人の魔術師と世界樹の大精霊様を説得する』でい
いんだな？」

「ええ……私が不甲斐ないばかりに……申し訳ありません」

泣きそうな顔をしながら土下座でもする勢いで俺を謝つてくるア
リス。俺はアリスの頭をポン、と叩いた。

「どうせ此処に来た時点で迷惑が掛かってるんだ。もう慣れたよ」
極めて優しく喋る。アリスはその言葉で元気が出たのか、涙は引つこんでいた。

「それじゃあ、アリス。この学校を案内してくれないか？ こんな建物テレビでしか見たことがないしな。中も気になる」

「はい！」と言い学校へ駆けてくアリス。そんなアリスを見て前途多難だなあ、と思う。しかし、楽しみでもある、と思い藤夜は可笑しくなった。

「いらっしゃりですよーー 早くー！」

アリスが呼んでいる。何時の間にかアリスは林を出ていた。慌てて追いかける。

そう、藤夜の新たなる生活は始まつたばかりなのである。

第四話・新たなる生活（後書き）

ふう。今日は少し短めでしたね？

藤「何故疑問形？」

ところで、最近文章力のない鬪魂は他の人の作品を見て勉強していました。

藤「無視！ 無視ですか！ まあ、作者も学ぼうって意志はあるのか。関心関心」

それで読んでたら面白い小説がありまして読んでいたのですよ。どんな人が書いているのかなあ？ と思いプロフィールを見ると…：『中学三年生』俺と同じ歳？ マジですか。これって感じになりました（涙）

藤「まあ……ドンマイ！」

つづ。感想などドシドシ書いてください。待っています。

名前の表示を竜灯から藤夜に変更しました。

第五話・思いがけない出会い

第五話・思いがけない出会い

「うわあ」

思わず感嘆の声をもらした。

所狭しと本が並んでいる。あの隠し部屋は本棚が縦に伸びて建物みたいだが、ここはまるで学校の図書室の様だ……まあ図書室なんだけど。

アリスに学校を案内してもらつて、初めに連れてこられた場所が此処。久しぶりに見た図書室だが、前に見た学校の図書室より大きい。いや、かなり大きい。裕に5倍はある……それ以上かもしれない。

俺が図書室の大きさで驚いている姿を見たアリスは、クスッと笑つて説明してくれた。

「ここは世界で3番目に大きいと言われている図書室です。ここでは魔法についての専門書。他にもモンスター図鑑に魔法具辞典、それにおいしい料理で彼氏のハートをゲットせよ！って本や必ず成功するダイエット！なんて本まで様々な本がそろつているんですよ。ここまで集めるのにどれだけ苦労したことか……」

拳を握り、高々と上げて涙するアリス。

……なんか苦労してんだな。って後半の本つて……ここは聞き流しておけ。うん、そうしよう。知らぬが仮つて言つしな。

「こしてもす」にな。こないうこの世界について少しばかるかな……うん。読めんぞ。翻訳できても文字は理解できないんだな」

適当に本を手に取りめくつてみるが、よくわからん文字が羅列しているぞ。頭が痛くなりそうだ。

「あれ？ そんなことないですよ。もひとつ文字を意識してみてください」

言われた通りに一つ一つの文字を意識してみると、今まで謎の記号だった文字が頭の中で日本語として理解できるようになつた。

「な、なんじや じつや あ

思わず本を落としてしまう。だが、もう一度拾つて読んでみるとこの本は英雄が活躍する小説であることが分かつた。見える文字は謎の記号なんだが、頭でその文字を翻訳してみたいた。

うーん。不思議な感覚がするが、確かに便利である。偉い外国人なんかは通訳の人があいているから楽に他の外国人と話ができる。しかし書籍などの場合、翻訳家がその書籍をその国の言葉に直す必要があるので。

「魔法つてホント便利だな」

思わず呟いてしまつ俺であった。

そのあともアリスに案内されて、色々分かったことがある。

まず、部屋が無駄に大きい事。今まで、学校で見てきた部屋の2倍はある。それに、なぜかよくわからん部屋も大量にあった。たとえば拷問部屋に牢屋、さらには美容室や散髪室などと『学校かんけーねー!』って叫びたくなる。ほかにも…… etc. しかも、まだ発見されてない未知の部屋が沢山あるらしい。こんな学校造つたやつが正気の沙汰とは思えん。

その頃にはすっかり暗くなり、夜になっていた。

「あれ？」

困ったことになった。

アリスが居ね——————!

ついさっきまで俺の前にいたアリスは、俺が目を離している隙に何処かへ行ってしまったみたいだ。

……うん。これは俺が迷子つてことになるじゃん…… 『こんなよく分からん学校で迷子とか…… 笑えねえ。』

「まあ適当にぶらついてればアリスにも会えるか」

そう結論づけて前へと進む。

「ん？」

歩き初めて2分ぐらいした時だつた。薄暗い廊下の先に何かが動いている。俺はその何かに好奇心を刺激され近づくことにした。足音をたてないように忍び足で何かに接近していった。

最初は、ぼやけていたその何かはよく見ると人の形をしていた。

「アリスかな？」

そう呟いた声は狭い廊下に思つたより響き、自分の存在をその人影に気づかせてしまった。

そして、自分から逃げるよつに走つていつた。

「ちょっとまつて！」

慌てて追いかける。ここで逃げるといつ事は、その人影がアリス出ないことは明らかだ。

人影は目の前の角を右に曲がった。その人影についていく。だが、慌てて曲がつたので足を挫き、そのまま派手に転んだ。

しかし、藤夜が転んだことは幸いとなつた。

「いっつ……」

顔を上げると、自分の上を通り過ぎる影があつた。慌て振り返ると、そこにはまだ幼い少女がナイフを持つてこちらに近づいてくるのが見えた。

そのまま転んでいなかつたらナイフで急所をグサリ、と殺されたいた。その事実に、藤夜は戦慄を覚えた。背中から嫌な汗が噴き出してくる。

恐怖で竦み上がつた体を叱咤し走りつとする。そのままでは殺されるのは目に見えている。

しかし、走ろうと立ち上がりつて前を見た瞬間、藤夜は絶望した。目の前が行き止まりだつたからだ。

「くつ！」

振り返り少女を見つめる。後ろは行き止まり、前はナイフを持った少女。しかも、その動きを見ると素人ではないことがわかる。絶望的だった。いきなり訳も分からぬ所で殺されるのか。藤夜は自分の運の無さに呆れさえ出てきた。

「もう……ダメだ」

死ぬ覚悟を決める。しかし、後ろの壁の上にある小窓から光が差し込んだ。思わず上を見る。

そこには金色に輝く月が見えた。だが、月の光が射そうと状況は変わらない。

諦めて少女を見る。そして、月明かりに照らされた少女を見て絶句した。向こうも同じ様にこちらを見て驚いている。
二人は同時に叫んだ。

「美琴！？」

「お兄ちゃん！？」

そこには、数年前他界した妹が立っていた。

第五話・思いがけない出会い（後書き）

どうも。『激闘魂』です。

いや～。嬉しいですね。初めて感想を貰いましたよ。

自分の中では感想なんて空想上の存在だと思ってたのに（おい
応援してくれる読者様の為に書こう！）と俄然やる気に燃える『激
闘魂』でした。

これからも『大魔導師になろう〜？』をよろしくお願ひします。

ではでは。ノシ

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3110f/>

大魔導師になろう！？

2010年10月13日01時09分発行